

小野 あずさ

Mr. Cool

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願い致します！

昨年は17の小中スケールの公演／プロダクションの照明デザインに関わらせていただき、沢山のタレントある方々に出会えることができました。このような貴重な機会をくださった皆様に、心から感謝を申し上げます。そんな一年の内に、出会いも沢山ありましたが、悲しいお別れもありました。

英国のコンテンポラリーダンス、ライブアート、そして演劇界で、カリスマ的存在だった照明家のシャヒーン・ヤブロヤン氏が昨年9月に癌で他界されました。亡くなられてから3カ月後だった先週、彼の友人や仕事仲間を集めた追悼記念会が行われ、私も参加させていただきました。

私が初めて、シャヒーン氏にお会いしたのは、今から12年前のことです。私はまだ大学に行き始めた頃で、校外研修の一環で、プロフェッショナルのプロダクション、“Deep End – 水底”という演目の、サイトスペシフィック・プロジェクトに携わり、プロの照明家のアシスタントをするのが我々学生に与えられた任務でした。その照明家がシャヒーン氏でした。19世紀半ばに建てられた巨大なスイミングプール施設が会場として使われ、その4階建ての建物全体を観客が誘導されながら鑑賞・観劇するというスタイルの公演でした。つまり、照明を建物のいたるところに仕込んでは、ケーブルを目立たないところに這わす、果てしない作業が我々の任務でした。しかも、長年閉鎖されていた建物だったので、作業灯もまともになく、暖房すらつかない状態で、真冬の風がヒビ割れた窓から吹き込むという、過酷な現場でした。

人扱いが荒く、厳しいことで知られるディレクター／アーティスト（名前はあえて伏せますが）のアシスタントについていた演出チームや舞台美術チームの学生たちは、毎日涙を流しながら仕事に臨んでいて、とても気の毒でしたが、我々照明チームは、どんな過酷な状況下に置かれても、冷静で大らか、かつ明確なシャヒーン氏の指揮のお陰で、よいチームワークとモチベーションを最後まで保つことができました。シャヒーン氏の寛大さ、謙虚さ、紳士さは、今まで出会った照明家、いや、今まで出会った人の中で一番だったと今でも思います。それは、きっとみんなも感じていたことであろうし、彼に対する周りの敬意は、日に日に厚くなっていったことは、肌で感じることができました。

シャヒーン氏の照明は、建物の歴史と特性、そこにいる亡霊や過去の空気を呼び起こすような、言葉では言い表せない尊さと美しさがありました。観客は、まるで時間を遡って、その場所に存在したという感覚さえ覚えるような照明でした。使った機材は、大量のPar16（Birdies）、650w Fresnels、Source4が主体で、あとは高電圧ネオン管を空のスイミングプールの淵に沿わせたり、小型蛍光灯、Architectural lamp, Rope light, 裸電球や、水エッフェクトマシン（Gobo Rotator）など、クラシックな機材が大半でした。古びた白い壁をうまく生かした光のソフト反射や、曇りガラスをフロストとして使ったり、天窓から入る神秘的なビーム光線や、元々そこにあったむき出しのケーブルや穴の開いた壁を光で強調したりというデザインの仕方をされていました。サイトスペシフィックの照明の面白さは、ここにあると思います。建物自体の歴史を物語ったり、奥行きをつけたり、明かりを灯す要素はそこら中に散らばっています。シャヒーン氏は、それらの質感や物質のスケールを自由に、遊び心を散りばめて操っていらっしゃいました。とても生き生きした、刺激的な現場だったことを今でも鮮明に覚えています。現場でもどこでも、毎日ダンディーなスーツを着こなすMr. Cool（シャヒーン氏）の姿も。

シャヒーン氏は、亡くなる1日前に、シャンパンとケーキを頬張りながら、奥様にこう伝えたそうです。「死ぬのは怖くないんだよ。私が死んだら、火葬してほしい。そして、私の灰を花火で空高く打ち上げてほしい（笑）」と。私は、今回参加させていただいた彼の追悼記念会で、上演されたこの花火の映像を見て、あまりの美しさに号泣しました。ロンドンの運河に浮かべられた、ナローボートの屋根にいくつもの炎が灯され、ボートの窓は藍色の光が呼吸するように心拍しながら、仲間たちの方にゆっくり近づいてきます。録音された彼の優しい声と愉快な音楽も、ボートから聞こえてきます。なんだかとても楽しそうです。そしてボートがみんなの前に到着した瞬間、一斉に可憐な花火が何発も空高く打ち上げられました。シャヒーン氏の満天の笑みが、ロンドンの夜空に広がったように見えた瞬間でした。



“Deep End”プロダクション



追悼記念会で配られたシャヒーン氏の思い出集
（中央: 例の花火ボート）